

高齢者の出番づくりに役立てるICT

ーコンパクトシティ、スマートシティ時代のまちづくりー

富山インターネット市民塾推進協議会事務局長 柵 富雄



まえがき

富山市は、地域づくり政策の一環としてコンパクトなまちづくり（コンパクトシティ構想）を進めている。LRT（次世代型路面電車システム）の整備など公共交通網を充実させることで、車を使った移動ができなくなる高齢者も公共サービスを受けやすく、しかも行政効率も向上させるものである。

また、富山市は環境未来都市構想への取り組みを始めた。コンパクトシティ構想を発展させ、超高齢社会を見据えた公共交通網を一層整備するとともに、自立型エネルギー循環・資源循環システムや付加価値創造によるビジネス、産業の振興を目指そうとしている。これらにはICT（情報通信技術）を応用したさまざまな先進機能の実現が見込まれており、各地で実験的な取り組みが始まっているスマートシティにも通じるものである。

急速に進むICTは、一層社会生活を豊かにし、恩恵をもたらす一方で、これを積極的に活用しない高齢者にとっては、社会参加のバリアとなることも懸念される。コンパクトシティ、スマートシティ時代に、高齢者の地域社会との関わり方はどのように変わるのだろうか。高齢者の豊かな知識・経験が生かされ、生きがいを持つことができる地域づくりには何が必要か。その中でICTの役割は何か、富山市での市民の取り組みをもとに考えていきたい。

1 シルバー情報サポーター活動

平成22年、「シルバー情報サポーター活動」が発足した。富山市を活動エリアとし、インターネット市民塾*1に参加する幅広い世代がサポーターとなって、高齢者のICT活用を支援している。活動のねらいは、高齢者の情報バリアフリーを図り、積極的な地域参加を促し、生き生きとした暮らしにICTを役立てようとするもので、次の

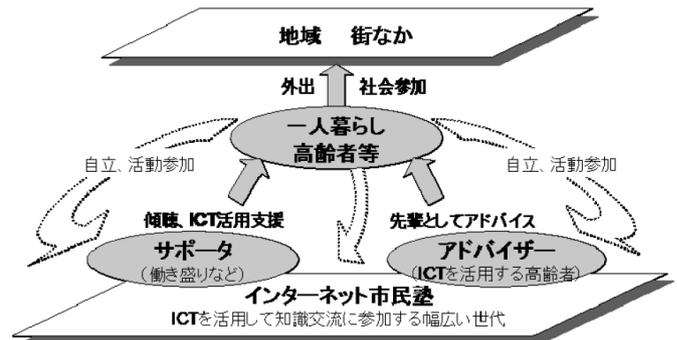


図1 シルバー情報サポーター活動の全体図

ようなステップを活動目標としている。

- ① 高齢者がICT機器の便利さへの関心を持ち、
- ② その中で得られる情報活用への関心を高め、
- ③ その情報を生かした街なかへの外出と地域社会との関わりを促し、
- ④ 高齢者が持つ豊かな経験・知識を地域社会に役立てる社会参加を促す

まず初めに、高齢者がICT機器への関心を持つ手立てとして、広く普及してきたスマートフォン（iPhone）、タブレット端末（iPad）を活用することとした。これらの機器は、近年ユーザビリティの向上がめざましいものの、高齢者には「新しいものは難しい」という先入観が数居となっていることが多い。これを和らげ簡単に活用して便利さを体験するため、これらの機器を使って、身の回りの出来事を「つぶやき」として発信することから始めている。「つぶやき」は、高齢者にとってより使いやすいユニバーサル・デザインを取り入れたアプリを開発し、ソーシャル・サービスのTwitterを利用して発信する仕組みである（写真1）。仕事を持ちボランティアとしてこの活動に参加している者が多い情報サポーターも、ネットを通じて高齢者の「つぶやき」に、いつでも耳を傾ける傾聴活動を行うことができるようにした。

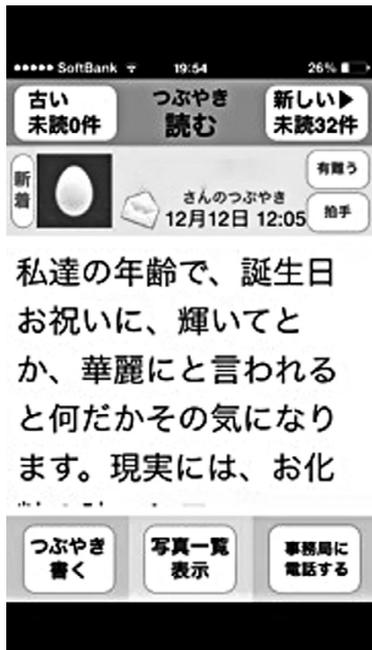


写真1 高齢者仕様「つぶやき」アプリの画面

ネットでの「つぶやき」、その傾聴と合わせて、シルバーと情報サポーターが一堂に集まる交流会を月1回開催している。交流会では、情報サポーターから、生活の中に便利に役立っている事例「iPhoneと私」の発表や、「つぶやき」を使って企画したバーベキュー交流会を開催するなど、フェイス・ツー・フェイスの交流も盛んである。日頃ネットでお互いの「つぶやき」に関心を持ちつつ、初めから親しく交流しにくいシルバーも、共同体験を通じて、サポーターやシルバーの人柄に触れることで、ネットでの「つぶやき」も活発化している。

情報サポーターは、この「つぶやき」を通じてICT機器のさまざまな活用を促す。毎月第1、第3火曜日は、その活用を試す機会として、フェイス・ツー・フェイスでの「ICT茶論（サロン）」を開催している（写真2）。この「ICT茶論（サロン）」に、富山大学の学生も加わり、二世代離れた若者がマン・ツー・マンでシルバーの疑問に答えている光景が見られる。大学生は、この活動への参加を通じて、高齢者のICT活用教育の研究にも役立つようとしている。

「ICT茶論（サロン）」には二つの決まりごとがある。ひとつは、毎回どんな簡単なことでも、ひとつだけ新しいことを覚えること。終了時には、一人ひとりが今日のサロンで学んだことを発表している。もうひとつは、シルバーは楽しそうに学ぶこと。「われわれシルバーが、



写真2 マン・ツー・マンでサポートを受ける「ICT茶論（サロン）」の様子

ICTを使って生活を楽しんでいると、子どもや孫たちが将来に希望を持ち、歳を重ねる目標になる」という。その次世代への温かい心の表れとして、シルバーから、就活を迎える大学生に模擬面接を行おうという提案が出た。模擬面接では、厳しくも温かいシルバーの言葉に、大学生も「本番」に向けて得るものが多かったという。

情報サポーターは、ネットとフェイス・ツー・フェイスによるこれらの機会を通じて、街なか情報をシルバーに積極的に提供している。一方、街なかに設置されている情報サイネージ端末には、活躍する高齢者を紹介する映像や、高齢者が参加しやすいイベント情報などを表示し、地域参加を促している。このように、シルバーにはICTの活用を通じて外出の機会を積極的に作り、引きこもりの防止と、社会との関わりを持つ機会を作っている。

このサービスに参加するシルバーは、スマートフォンやインターネットの活用に関心を持って自発的に参加を申し込んだ者のほか、一人暮らしを心配し離れて住む家族から勧められて申し込んだ者もいる。サービスを受けてきたシルバーの中には、ICT機器を活用して自立的に活動を始める「卒業生」や、サービスを提供する情報サポーターに転身するケースも見られる。現在、サービスを受けているシルバー、情報サポーターを合わせて約30名が活発に活動しているほか、インターネット市民塾で活躍している高齢者を「シルバー情報アドバイザー」として登録し、ICTを活用して活躍する高齢者の良き手本役として、また、情報サポーターの相談役も担っている。

このような富山市での活動が、隣接する立山町にも伝わり、「ICT茶論（サロン）」の「出前」の要請を受けて



写真3 「ICT茶論(サロン)」の
出前講座の様子

応じている。この時、日頃学ぶ側のシルバーが「出前先」の高齢者に教える立場となった(写真3)。生き生きとして教えるシルバーには「教えることが最高の学び」となった。

3 町歩き活動「ブラ富山・四次元マッププロジェクト」

インターネット市民塾には、町歩きをしながら富山の歴史を学ぶ「ブラ富山」が開講している(写真4)。定年後の地域活動として市民が始めた活動である。この「ブラ富山」では、江戸時代の古地図を持って町歩きをしながら、当時のまちづくりを学ぶ。

この古地図をデジタル化し、スマートフォンやタブレットを活用して町歩きをしようと、新たな取り組みが



写真4 「ブラ富山」活動ホームページ

始まっている。富山市とインターネット市民塾による市民協働型事業として始まったもので、市民が郷土博物館などと連携して江戸時代や大正時代のデジタル地図を作成している。これを、現在の地図(GoogleMap)の上に、重ね合わせて表示できる「四次元マップ」アプリを開発した。町歩きしながら、戦火によって消失してしまった江戸時代や大正時代のまちづくりを学ぶことに活用する。それぞれの時代の地図の上には、江戸万治年間の町の様子や大正時代の資料映像が町歩きの位置に合わせて表示されるようになっている。これらの情報源は郷土博物館などの公共機関のほか、プロジェクトに参加する市民や、古くからその町に住んでいる住民の提供によるものである。

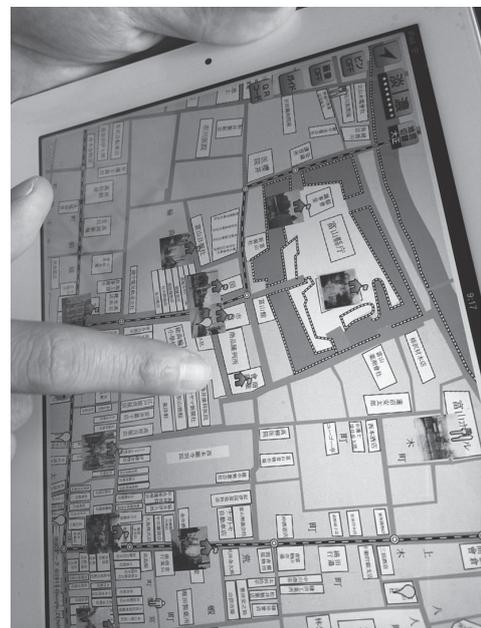


写真5 「四次元マップ」アプリ

町歩きでは、20代から70代の幅広い世代の市民の参加があり、今はコンクリートに埋まっている町なかにはすばらしいまちづくりがあったことに、毎回のように驚きの声を聞く。特に高齢者からは、自身の記憶を懐かしく想起し、参加者に説明する様子が見られ、若い世代への語り伝えの場にもなっている。その情報はプロジェクトのメンバーによって、「四次元マップ」にも反映される仕組みである。プロジェクトのメンバーの中には、「四次元マップ」づくりにボランティアで働く高齢者もいる。まさに市民参加の「四次元マップ」であり、高齢者の出番が生きる取り組みでもある。



写真6 「四次元マップ」を使って江戸時代を町歩き

4 まちづくりに果たす高齢者の役割、ICTの役割

富山市では、高齢者単独世帯が8,000世帯以上あり、今後、高齢化、核家族化が進むにつれ、さらに増加すると予想されている。このため、富山市はコンパクトなまちづくり（コンパクトシティ）の一環として公共交通網を整備し、車を使うことが難しくなる高齢者も公共サービスや医療機関を利用しやすくしたいとしている。また、市中心部に高齢者向け住宅を整備し供給を進めている。これらの住居にはさまざまな見守りのためのICT化が今後導入され、いわゆるスマートハウスが増加すると予想される。

このように、まちづくりのハード面が充実することで、高齢者にとっても住みやすくなっていくが、一方で高齢者が生きがいを持てるソフト面も重要である。厚生労働省は、次期健康づくりプラン*2の中で「社会参加・人とのつながりづくり」と「生活の質」との関連を取り上げるとともに、「健康格差」が生じない地域社会づくりを提案している。富山市でも、高齢者福祉施策*3の一番初めに「社会参加と生きがいづくりの推進」を掲げ、「高齢者が自ら活動する意欲と交流する喜びが持てるまちづくりに努める」としている。

本稿で紹介した「シルバー情報サポーター活動」や「ブラ富山・四次元マッププロジェクト」は、高齢者の社会参加と生きがいづくりとして、まちづくりのソフト面に位置づけることができる。趣味・文化活動やスポーツ・レクリエーション活動とは異なり、一步踏み込んだ社会参加であり、住んでいる町の古い歴史を知る高齢者ならではの社会参加と言える。

その高齢者の出番づくりに役立っているものとしてICTがある。ICTの進展は、高齢者にとってマイナスとして捉えられることが多い。しかし、ICTを活用した高齢者の出番づくりは、本稿で紹介した二つの取組みに見られるように、社会参加の意欲を高めている。「シルバー情報サポーター活動」のリーダーであるAさんは、定年後に社会から期待される役割を見出し、ついに70歳にして起業した。その過程にインターネットによる地域の市民との新しい関わりがあった。インターネット市民塾で講座を開催することで、自らの知識、経験が地域に役立つことに気づき、地域で働く目標に結びついている。起業した仕事は、「高齢者がいつまでも生き生きと笑顔を保つ」ための健康指導である。高齢者の生活の質（QOL）を高めることに、ICTが役立っている好例と見ることができる。Aさんは「笑顔は自分がうれしいだけでなく、傍らの人たちを楽しくします。はた（傍）、らく（楽）、はたらく（働く）です」（「つぶやき」より）」という。Aさんにとって、ICTはバリアではなく、楽しく働き社会に役立てるものとなっている。

高齢者の豊かな知識と経験が生かされ、生きがいを持てるまちづくりには、高齢者の出番づくりをどのように図るかは大変重要である。コンパクトシティ、スマートシティ時代には、このような出番づくりに役立つICTの活用と市民のコミュニティを育てる事が、まちづくり施策に一層求められるであろう。

【参考・引用】

- *1 富山インターネット市民塾
<http://toyama.shiminjuku.com/>
 富山県、県内市町村、大学、企業等で構成する推進協議会が運営。平成10年に共同研究を始めて以来、地域の教育支援、地域人材の育成を促進している。働き盛りからリタイアした高齢者まで、幅広い市民が、それぞれの経験やノウハウ、地域課題をテーマに、「市民塾」を開設している。
- *2 「次期国民健康づくり運動プラン策定専門委員会資料」、厚生労働省、平成23年
- *3 「富山市高齢者総合福祉プラン（平成24年度～26年度）」、富山市、平成24年

Profile 柵 富雄 (さく とみお)

富山県生まれ

【現職】

富山インターネット市民塾推進協議会事務局長、NPO 法人地域学習プラットフォーム研究会理事長、学習ソフトウェア情報研究センター主任研究員、慶應義塾大学 SFC 研究所員（訪問）、インテック先端技術研究所研究開発部

【委員等】

第2期～6期中央教育審議会臨時委員（文部科学省）、地域力創造アドバイザー（総務省）

【主な著書等】

「シリーズ大学と社会を結ぶeポートフォリオ」、文部科学教育通信 No.309,310,311,312 (2013)

「インターネット市民塾と地域の協働」、学遊圏、No.22、(2004)

「参加して学ぶボランティア」、共著、玉川大学出版部、(2004)

「インターネットを生かした現代版寺子屋システム」、月刊マナビィ、No.29、ぎょうせい、(2003)

ほか

【最近の講演等】

「高齢者が生き生きと暮らすインターネット社会」（電子情報通信学会総合大会）

「Developments of Social Recognition System by e-Portfolio and e-Passport to Promote Social Participation」（Learning Forum in London）、(2012)

「日本における ICT を活用した教育」（国際協力機構（JICA）ヨルダン政府関係調査団研修）

「ラーニング・シティー学びによる地域イノベーションと情報通信—」（電子情報通信学会）

「子どもたちに希望を持たせる住民の役割、地域と共につくる子どもたちの安全安心」（文部科学省ネットワークフォーラム 2011）

「学び考え成長する地域づくり—市民塾による知の還流—」（総務省地域力創造セミナー）

「日本の生涯学習—インターネット市民塾の取り組み—」（OECD 教育革新センター）

「市民参加型事業におけるメディア・リテラシーの可能性」（NHK 放送文化研究所）

ほか
